

I 利用の手引き

本書は、労働統計を組み合わせる新たな指標を計算する方法と結果を集めたものです。言わば、労働統計の加工指標事例集です。

次ページ以降に、取り上げた 52 の指標の名称を、21 のカテゴリーに分けて掲げるとともに、各カテゴリーを概説しました。

各指標の説明は独立しています。関心のある指標を拾い読みしても構いません。巻末には索引と、一部の指標について、数学的な補注を載せました。

各指標の説明は、

- ①指標の解説、②指標の作成結果、③作成結果の説明、
- ④指標の作成方法、
- ⑤指標のデータ

の 5 項目から構成されます。

① 指標の解説

意味、取り上げる理由、解釈など、全般的な解説です。

② 指標の作成結果

グラフを使って、作成した結果を示します。

③ 作成結果の説明

②の作成結果の説明です。

④ 指標の作成方法

計算方法をなるべく具体的に説明します。

⑤ 指標のデータ

作成した指標の数値です。この数値をもとに②のグラフを作成します。

指標によっては、必要に応じ、関連事項の解説や関連する指標の紹介を⑥として追加します。

読者の皆様に合った方法で、本書をご活用いただければ幸いです。

労働統計加工指標

	カテゴリー		指標	頁
1	労働投入量、労働生産性、賃金コスト	1.1	労働投入量指数	p. 8
		1.2	労働生産性指数	p. 11
		1.3	賃金コスト指数	p. 14
2	労働分配率	2.1	6通りの計測方法による労働分配率	p. 18
3	労働の質	3.1	労働の質指標－産業間比較－	p. 22
		3.2	労働の質指標－時系列変化－	p. 25
4	パートタイム労働者等	4.1	パートタイム労働者比率	p. 32
		4.2	フリーター数、若年無業者数	p. 36
5	就業分野の男女差	5.1	就業分野の性差指数	p. 40
6	出向者、単身赴任者等	6.1	出向労働者比率	p. 46
		6.2	単身赴任割合	p. 48
7	各種の失業指標	7.1	産業別雇用失業率	p. 51
		7.2	職業別雇用失業率	p. 55
		7.3	雇用形態別失業率	p. 58
		7.4	学歴別失業率	p. 61
		7.5	長期失業指標	p. 63
		7.6	失業継続期間と失業頻度	p. 66
		7.7	損失所得を考慮した完全失業者数	p. 77
		7.8	日本におけるU1～U6	p. 82
8	UV分析	8.1	均衡失業率	p. 90
		8.2	ミスマッチ指標	p. 104
9	失業者世帯の収支	9.1	失業者世帯の支出水準	p. 107
10	過剰雇用	10.1	生産性方式による推計	p. 115
		10.2	人件費比率方式による推計	p. 119
11	労働移動	11.1	転職率	p. 122
		11.2	転職希望率	p. 132
		11.3	産業間転出割合・職業間転出割合	p. 135
		11.4	労働力配分係数	p. 140
		11.5	事業主都合・自己都合離職率、会社紹介転職者割合	p. 144
		11.6	平均勤続年数	p. 147
12	雇用創出・喪失	12.1	事業所の開業率・廃業率	p. 153
		12.2	新規開業による雇用増	p. 160
		12.3	倒産発生率	p. 163

	カテゴリー		指標	頁
13	所定内給与の賃金格差	13.1	所定内給与の賃金格差	p. 165
14	ラスパイレス賃金指数	14.1	ラスパイレス賃金指数	p. 182
15	各種の賃金格差	15.1	就業形態別賃金格差	p. 205
		15.2	男女間賃金格差	p. 210
		15.3	標準的労働者と中途採用者の賃金格差	p. 212
16	退職金の格差	16.1	退職金の学歴間格差	p. 216
		16.2	退職金の規模間格差	p. 219
17	労働移動に伴う賃金・所得変動	17.1	転職による賃金変動 D.I.	p. 222
		17.2	転職による退職金減少率	p. 227
		17.3	転職による生涯賃金減少率	p. 231
18	所得の不平等度指数	18.1	ジニ係数	p. 234
19	役職関連指標	19.1	部長・課長比率	p. 241
		19.2	部長・課長の部下の数	p. 246
		19.3	女性役職者割合	p. 251
20	勤労者生活関連指標	20.1	勤労者生活指標	p. 253
21	生涯賃金など生涯に関する指標	21.1	生涯賃金	p. 259
		21.2	雇用者の平均引退年齢	p. 277
		21.3	生涯労働時間	p. 281
		21.4	コーホートの別にみた生涯労働時間	p. 288

(各カテゴリー概要)

1 労働投入量、労働生産性、賃金コスト

労働投入量指数は、生産活動に利用された労働力の大きさの推移を測る指標です。次に、労働投入量指数を用いて、労働生産性指数を計算します。これで単位労働投入当たり（就業者1人1時間の労働当たり）の生産量の推移がわかります。そして生産1単位当たり
に要する賃金を表す賃金コスト指数を求めます。

2 労働分配率

労働分配率は、生み出された付加価値のうち労働者がどれだけ受け取ったのかを示すものです。6通りの方法で計算します。

3 労働の質

同じ1単位の労働投入でも、勤続年数などによって生産への貢献

が異なると考えられます。賃金の違いを利用して、労働の質の変化が現れる指標を試算します。

4 パートタイム労働者等

いわゆる非正規労働の実態は多様です。統計調査でも、様々な定義、とらえ方がなされています。いろいろな定義で、パートタイム労働者比率の推移を見比べてみます。また、昨今、関心を集めているフリーター、若年無業者の数を計算します。

5 就業分野の男女差

男性と女性とでは、就業する産業、職業が必ずしも同じではありません。男性が多く就業する産業、職業があれば、女性が多く就業する産業、職業もあります。就業分野の性差の程度を示す指標を計算します。

6 出向者、単身赴任者等

出向や単身赴任に関する指標を計算します。

7 各種の失業指標

産業別、職業別、雇用形態別など、様々な属性の別にみた失業率を計算します。また、労働力のフローデータを利用した失業頻度や失業継続期間の計算を紹介します。

さらに、一般に用いられる失業率を含め、6通りの失業指標が発表されている米国にならない、これらの日本版を計算します。

8 UV分析

失業率の分析手法に、欠員率との関係をもて、失業率を均衡部分と需要不足部分に分けるUV分析があります。このUV分析の計算を紹介します。

9 失業者世帯の収支

失業が家計に与える影響は、世帯主が失業するかどうかで変わると考えられます。勤労者世帯と世帯主が失業した失業者世帯の支出格差をみます。

10 過剰雇用

日本の雇用調整は、残業時間の削減や配置転換から始められ、直接的な解雇は最終手段なので、企業は生産量に見合う水準を超える過剰雇用を抱えるという指摘がよくあります。過剰雇用の大きさを2通りの方法で計算します。

11 労働移動

転職率をはじめとした労働移動に関連する指標を計算します。

12 雇用創出・喪失

雇用は事業所の新設や拡大によって創出される一方、事業所の廃止や縮小によって喪失します。事業所の開業率・廃業率、新規開業による雇用増などを計算します。

13 所定内給与の賃金格差

賃金は、年齢や企業規模、産業、地域によって格差がみられます。所定内給与の格差を示す指数を計算します。

14 ラスパイレス賃金指数

通常の賃金指数は、特定の年の労働者の賃金水準を100として各年（月）の労働者の平均賃金の水準を表すものです。個々の労働者の賃金に変化がなくても、労働者の構成（学歴別構成や年齢構成など）が変わることで変動することがあります。労働者の構成を固定した賃金指数（ラスパイレス指数）を計算します。

15 各種の賃金格差

各種の賃金格差を示す指標を計算します。まず、就業形態による格差を時間当たり賃金でみます。続いて、労働者の属性を調整の上、男女間の格差、中途採用者と標準的労働者の格差をみます。

16 退職金の格差

退職金の支給額は、学歴や企業規模によって格差がみられます。ここでは退職金の格差指標を計算します。

17 労働移動に伴う賃金・所得変動

転職に伴う賃金の変動をみます。また、転職を一度した場合、転

職をしなかった場合に比べて退職金や生涯所得がどのように変化するか、転職をする年齢の別にみます。

18 所得の不平等度指数

所得の格差の程度を示す指標として知られているジニ係数を、全世帯と勤労者世帯について計算します。

19 役職関連指標

部長や課長などの役職段階に着目した指標を計算します。女性の役職割合もみます。

20 勤労者生活関連指標

勤労者生活の状況を、一つの数字で表す指標を試算します。所得、消費、健康、余暇など7分野ごとに求めたうえ、さらに全分野計を計算します。

21 生涯賃金など生涯に関する指標

労働者が生涯に得る賃金の総額（生涯賃金）、平均引退年齢、生涯労働時間などを計算します。生涯労働時間は、コーホートの別にも作成を試みました。

○利用上の注意

1) 産業分類について

日本標準産業分類が2002年と2007年に改定されました。日本標準産業分類に基づいて産業別統計を作成している継続調査の多くは、この10年あまりで2度、表章産業の改定が行われています（労働力調査、毎月勤労統計調査、賃金構造基本統計調査など）。産業によっては、現在と比較できる統計が改定前になく、統計を遡ってみるのが困難なものがあります。

なお、産業の名称は、「電気・ガス・熱供給・水道業」を「電気・ガス業」のように、差し支えない範囲で略称を使っている場合があります。

2) 「賃金構造基本統計調査」の年齢階級区分について

「賃金構造基本統計調査」では、2008年から統計の年齢階級が一部変更されました。それまでの「～17歳」、「18～19歳」の2階級が「～19歳」にまとめられ、逆に「65歳以上」が「65～69歳」と「70歳以上」の2階級に分割されました。各指標での扱いは、それぞれの項で触れています。

3) 2011年の「労働力調査」の結果について

「労働力調査」は、東日本大震災の影響で、2011年3月から8月までの各月分、及びこれらの月を含む1～3月期から7～9月期の四半期平均、2011年平均の公表値が、岩手、宮城及び福島の3県を除く全国結果となっています。参考として算出された当該3県を含む全国の「補完推計結果」も、一部の指標で利用しています。

4) 郵政民営化・分社に伴う統計への影響について

日本郵政公社の民営化・分社（2007年10月）に伴い、「労働力調査」及び「賃金構造基本統計調査」の集計上の取扱いが変更されました。「運輸業、郵便業」など一部の産業の統計は、時系列の推移をみる際には、この点に留意を要します。

5) その他指標全般について

今回、指標の作成方法の記述を、よりわかりやすくなるように見直しましたが、指標の内容に変更は特にありません。フリーター、若年無業者の指標を加えました。パートタイム労働者の労働費用、同一コーホートの入職率・継続就業率、同一企業への定着率、生涯時間当たり賃金は、作成方法等を十分に検討したいため、今回は外しました。